

蒔田先生の授業（中1 現在進行形の導入）「謎解き編」

英語”ワクワク授業”研究所 代表 中嶋 洋一



## 【序章】

クイズは、自分で考えた後に、答えを知るからこそワクワクするのです。視聴者参加型のクイズ番組や犯人が最後までわからない推理小説（テレビドラマ）が人気なのはそのためです。答えがわかってしまったら、興奮めしてしまいます。今から行う、蒔田先生の「謎解き」も同じです。

人間の知的好奇心から導かれた「感動」ではなく、指導の「技術」を知ったという程度の喜びでは、どちらが次のステージに進めるかは「論を俟たない」と言えるでしょう。何度も言いますが、この塾では、薄っぺらな、表面的な指導技術ではなく、「思考力」を鍛え、ゴールを明確にし、生徒目線で「授業デザイン」ができる資質と能力を育てることを目指しています。

では、「全員が書いたまとめ（62p）」を読んで、「すごいなあ」とか「自分もこの中の1ページに入っているんだ」という感慨だけで終わらずに、次のステップ（成長）につなげるためには、何が必要でしょうか。

アドバイザー、リーダーたちは、すでに10月（稲岡先生編）に向けて、構想をスタートしています。他のグループの取り組みに大きな刺激を受けたからです。言語活動は、1回目は体験のみです。そして、2回目からは学んだことを活かして修正できるようになります。それが「経験」です。ということは、本当に力が発揮できるのは2回目です。

蒔田先生の授業で見つけてみたこと、それは体験です。今まで、自分がやってきたことがまるで「子ども」のような取り組み（ごっこ遊び）であったことにショックを受けられるでしょう。そして、グループで徹底的に「生徒をやる気にする原理・原則」について討論が始まります。スイッチが入った状態で見ると10月の稲岡先生の授業では、生徒の動き、先生の言葉、そして掲示物などから「見えないものを見よう」と必死に目を凝らします。チャンネルさえできれば、面白いほど「授業の実体」（教師の理念、指導の背景、日々の言語活動、）が見え始めます。

途端に「他人（同僚）の研究授業」をみていると、「あれ？ここ、もったいない」「間が足りない」「この子の考えをもっと深掘りしなきゃ！」「この活動は要らないな」ということに気づけるようになります。人の授業の問題点に気づけると、自分の授業の問題点にも気づけるようになります。「自分の問題に気づけない人は、他の問題も気づけない」という方がいますが、それは逆です。自分の書いた文章は直せなくても、人の書いた文章を推敲しているうちに、自分の癖にも気づけるようになっていくのと同じです。

全員の「まとめ」を全て読まれた方は、すでに自分なりの考えや疑問を持っておられるので、これからする「謎解き」は、「そうだったのか！」という思いで、朱書きが止まらなくなるでしょう。

一方、まだ、全部を読んでおられない方が、この「謎解き」を読まれても、効果はあまり期待できません。自分でとことん考えていないこと、仲間が見つけた「原理原則」について自分の考えを持っていないことが理由で、「ふーん、そうだったのか？」というレベルで終わります。人は、ショックを受けないかぎり、本気で変えようとはできない存在です。「楽しさ」を倍増させる意味でも、「まとめ」を熟読した後で、この「謎解き」を読まれることをお勧めします。「まとめ」も「謎解き」も丁寧に読んでいない人が、話し合いに参加をしてもちっとも楽しくありません。

では、「まとめ」を読まれた方は「本論」へ進んでください。まだ、よく読んでいない方は、一旦、ここで裏返して（閉じて）「まとめ」の方を、丁寧に読んでから戻ってきてください。

## 【本論】

では、「謎解き」（なぜ、見た人の「心を動かす授業」ができるのか？）を始めます。

これから書くことはベテランの方には、かなりショッキングな（できていないことがわかる）内容であり、若い方には「授業の奥深さ」を知って驚嘆し、同時に畏敬の念を持つ（そこまで考えなければならぬのか！）ことになると思います。今まで、誰にも教わらなかったことであろうと思います。

9月の蒔田先生、10月の稲岡先生の授業分析を通して、生徒を育てるためには、明確なゴール（育った姿、生徒が何をどのようにできるのかというイメージ）を元に、そこに至る長期的な展望、中期、短期の緻密な計画を用意することが不可欠であることがわかります。ベテランと言われる方でも、無意識にやってしまうことがあり、活動や指示を意味づけられない方が多いように思います。

蒔田先生は、それを端的に説明されます。自分で、自分の授業、言語活動、テストについて理路整然と説明できるということは、日頃から、生徒にもその意義（何故、それをするのか）をわかりやすく伝えているということです。

「授業を変えたい」という思いよりも、自分の授業は「何がまずいのか」を自己理解することの方が先です。有効なのは、第三者（管理職、同僚、指導主事）の力を借りるか、または新刊でも紹介しているように「生徒へのアンケートの項目」を抜本的に見直し、自由記述で書かれた内容から「ヒント」を探ることです。

生徒の書いた建設的な意見に対して、ムツとしたり、無視したりする方は、最初から、今の授業を変えるつもりがない人、今までどおり、静かに聞いてくれればそれでいい、と考える人です。

学年末のアンケートでどんな言葉が出てくれば、教師としてのアイデンティティや自負心が高まり、自信がつくでしょうか。それは、授業を通して自分が変わってきている（授業が楽しくなった）、成長できている（教科が好きになった）という生徒からの感想です。さらに、もっとこんなことがしてみたい、こうなりたい、というコメントが書かれていたら、なんとかそれに応えてやりたいと考えるようになるのではないのでしょうか。

オンライン塾と対面塾の合同研修では、蒔田先生の授業と稲岡先生の授業を取り上げています。なぜなら、お二人とも、3年間の授業計画が1年生の4月にはすでにできているからです。ゴール（卒業時に育った姿）が非常に具体的であり、そこから逆算をしているということです。ですから、授業開きの5時間、最後の3時間はすでに最初の段階で構想ができています。テスト前の1時間、テスト返しの1時間も学習指導案を用意されます。前者は、グループでの教え合い、後者は教師の解説、訂正、グループでの話し合いという、場当たりの指導ではありません。

たとえば、前の1時間では、小先生活動、事前にグループごとに作った予想問題を印刷しておき、それを解く、振り返りのチェックポイントの確認（4月にはすでに定期テストができていますので、習熟のための活動が様々に用意されている）をします。テスト後はいきなり解説をしたり、解答を配布したりしません。まずは、ペアによる答えを言わない教え合い学習です。うっかりミスで失った点数を合計させ、次の定期テストに向けて互いに予告（自己申告）をします。最後は、訂正ノート（「何故そうなるのか」を自分に 向けて解説をする）に取り組みます。ノートで優れているものは、部分的にコピーを取っておき、後で生徒に見せます。

蒔田さんの場合、中3ではディベートに取り組みられました。全員がフォーマル・ディベートに取り組めるようにするために、マイクロ・ディベートなどを通して、物事を両面から見られること、ジャッジを育てること、論理的に伝えられるよう、トレーニングを課しておられました。もちろん、即興で質問ができ、それに即興で答えることが不可欠です。

そこで、蒔田さんは、そこから逆算をし、2年生では Show and Tell に取り組まれました。自分のメッセージを発信し、相手に伝わる言い方、プレゼンの仕方、さらには終わった後で即興の質疑応答ができるように訓練されました。

では、1年生では何ができるようになっていなければならなかったのでしょうか。それが、授業の最初にあった What am I? の中で referential questions (関連のある質問) が、即興で、多様に作れることでした。

さらに、常に目指されたのは、言葉の使い方を場面の中できは気づけるようになることです。それが、折り紙を使って現在進行形を導入する時に使われた Focus on Form の指導なのです。

(この Focus on Form は CLILL の元になった指導法であり、とても重要な部分なので後ほど詳しくお話しします)

Q&A は、掛け算九九と同じで、英語学習では「基礎・基本」です。ただ、Q&A だけ練習しても、喋れるようにはなりません。即興のやり取りにはつながりません。会話が続くためには、質問ができるということ、さらに円滑なコミュニケーションには、コメント力 (自分の気持ち、考えを伝えること) が不可欠です。必要なのは、キーワードを捉えて、すぐに関連する質問が作れることです。マンダラートの中心に Halloween と入れ、周りに関連する単語を書いていきます。

Festival, Jesus Christ, ghost, pumpkin, jack-o-lantern (カボチャ提灯), costume, “Trick or Treat!”, sweets, Shibuya, October 31, という単語が登場します。もちろん、日本語で書いても構いません。それを友達と紹介し合います。すると、なかなか考えが思いつかなかった生徒が「あっ、そうか」「それもありだ」と考えるようになります。

この協働学習が、足場掛け (scaffolding) となり、少しずつできるようになっていきます。日本語 (母語) で、このような連想力を鍛えておかないと、外国語に波及していきません。

教師は、「Halloween を今から友達に説明します。周りに書いたキーワードをナンバリングし、その順にストーリーで話していきます。マンダラードを見ながら話すことはできません」という指示をします。それによって、生徒はどの順序でどう伝えれば相手に伝わるかを考えます。ある生徒は、オーソドックスに「10月に行われる行事であること、カボチャを使うこと、子供たちが家を回ること」などを伝えるでしょう。

一方で、渋谷がいつもニュースに取り上げられることからスタートする生徒もいます。この場合は、問題点を明確に理解しているので、Halloween だけでなく、社会的なトピック (環境、人権、国際理解) につなげることができます。教師には、社会的なトピックは難しいという発想がありますが、実はそうではありません。つなげ方を知らないだけです。身近な内容から、どれだけでも社会的なトピックにつなげることが可能であり、むしろ、そうしていかないと、生徒は構えてしまいます。SDGs ばかりでは、耳タコで、授業で学んだ一般的な事実を述べるだけです。自分が体験していないことは喋れません。

しかし、例えば「iPhone と Android はどっちがお勧めか」では、発展させて SNS の問題 (プライバシー) につなげることができます。また、「大阪から東京に行くには、新幹線と飛行機のどちらがお勧めか」というトピックは、生徒にとって想像しやすい内容ですが、それぞれの問題点を何かという論点を与えることで「環境問題」につながります。

物事には、必ずメリット (良い点) とデメリット (問題点) があり、それを常に生徒に考えさせるようにすることが大事です。

ディベートでは、客観性、論理性が不可欠です。1年生の時から、reasoning (NO で答えてその理由を考える) という訓練、Firstly, Secondly, .. という論理的な言い方を身につけさせておけば、言語活動はどれだけでも豊かになります。教科書通りではなく、教科書に足りない (または時期的に遅い) と判断したら、責任を持って、他の教科書を参考に「独自のカリキュラム・デザイン」をすることが大事です。

蒔田先生は、言葉にとっても関心が高い方です。私が『15 フィフティーン』（ベネッセ、大津由紀雄先生、柳瀬陽介先生らとの共著）を上梓した時、即座に反応され、さらに英語授業研究会の全国大会で発表した「LOVE という英詩を自由に訳した実践」を聞かれた後、すぐに私のところにやってきて、「中嶋さん、これ、授業で使ってもいい？資料いただけない？」と言って来られました。日頃から、たくさんの本を読み、人と話し、メールもすぐに返事を送って来られるのは、人に興味があること、そして言葉の教師として、「言葉の使い方」に非常に高い関心を持っておられるからなのです。

だから、授業の中で wear のところで「(包帯を) まく、(メガネを) かける、(ズボンを) 履く、(ネクタイを) 結ぶ、(マントを) はおる」という言葉のニュアンス、母語の面白さを伝えようとしたのです。単に、包帯を wear とつなげるためだけではありません。

このように、授業をどう見るか、指導されていること、生徒の動きから何に気づけるかということとは、授業づくりの確かな視座を作るには、必要不可欠なことです。

では、皆さんの授業を見る視座をチェックしていきましょう。次のように、表層か深層かで紹介しますので、ご自分がどっちであったかを自己診断してください。

対面塾、そして福岡の方々には、一部お伝えした内容が含まれます。全員、ネタバラシはしないという約束にしておいたのですが、書いているうちに、どうしても書きたくなってしまった方もおられるようです (😅)。

次の2つの視点から見ていきます。自分はどっちだったでしょう。また、●レベルに迫るためにはどうすればいいのかを考えてみましょう。

#### ● 表層の捉え方 (経験が浅い先生の視座)

(指導技術中心で、文法だけを取り出し、言語活動とつながらない見方)

#### ● 深層の捉え方 (授業を変えるための視座)

(内容理解に造詣が深く、場面シラバスの中で言語材料を有機的に指導する考え方)

---

### シーン1 (始業前)

---

#### ● 表層の捉え方 (経験が浅い先生の視座)

- ① 生徒が教科書の本文を読む練習をしている。チャイムが鳴る前からやっている。附属中だからできるのだ、自分のクラスでは無理だろう。
- ② どの子も同じように読んでいる。徹底的にリピートさせたのだろう。

#### ● 深層の捉え方 (授業を変えるための視座)

- ① 生徒の動きから、日頃の指導を読み解くことが大事である。見えないものが見えるようになった時、教師の授業づくりの視座のレベルがぐんと向上する。生徒は We can see the ocean now. を音読している時に、どの生徒も同じ方向を指差していた。つまり、前時では、その方向に海の写真 (または絵が貼られており、そこを指差しながら読む練習をしていたことがわかる。蒔田さんの祝儀は、正しく読むレベルではなく、テキストを演読 (dramatize) し、コミュニケーション力につなげることがわかる。言葉は場面でしか意味を持たない。よって、正しい読み方の練習では意味がない。
- ② 蒔田さんだけでなく、田尻さん、稲岡さん、そして中嶋は、公開授業時だけでなく、通常の授業も3分前から始動していた。次回の稲岡さんの授業でもそれがわかる。理由は学習のアイドリング

(助走しておき、チャイムと同時に take off) をするためである。学習のレディネスを、授業が始まってから作るようでは遅い。中嶋の場合は、チャイムが鳴って挨拶をしたら、すぐペアで90秒チャック学習(英語→日本語、日本語→英語)が行われる。2人がそれぞれ答えられた数の合計を折れ線グラフに記入し、一週間後には提出をする。

よって、休み時間から主体的に個人、またはペアで練習をしていた。また、始まるチャイムと同時に教科書の本文を読む(全国の学校で使われているチャイムは、英国 Big Ben の鐘の音であり、その長さは大体18秒から23秒。高校入試のリスニングは1分間に150後程度の速さで読まれるので、聞き取れるようになるためには、日頃からその速さで音読ができるように鍛えなければならない。音と同じで自分が読む速さ以上で話される内容は聞き取れない。よって教科書の本文の語数を数え、チャイムと競争する。読み終わったら座る。間に合えばガッツポーズをする。間に合わなかった生徒は、家で必死に練習をする。目を速く動かせるようになれば、長文読解でも速く(短時間で)読めるようになる。

③ 研究授業では、多くの教師はソワソワしながら、授業の始まりを待っているが、その緊張は学習者にも伝わってしまう。特に国公立大学附属中(高)の場合、毎年、大きな研究大会が行われ、全国から数多くの教師が参観する。指導者にとっては、自分の取り組みの発表というよりは、教科部会としての歩み(足跡)を継続的に示すという使命を担っている。これは何を意味するか。生徒たちが参観者によって鍛えられる(自信を深める、育つ)ということである。緊張せずに堂々と発表し、朗々と語る。その育った姿に参観者は目を見張る。参観者からのコメントを次の日の授業で生徒に伝える。第三者の評価は、他校の生徒の様子を知らない生徒にとっては、大きな自信、学習意欲の喚起につながる。

余談だが、北原さんや田尻さん、そして中嶋は、現場を離れるまで全国からの参観者に対して100回以上、公開授業を行った。つまり、その回数分、学習指導案(時には略案)を書いたということである。授業力は、人に見せた授業の回数に比例する。独り相撲でやっている教師は批評されることがないため、自分の授業の問題点に気づけないまま(学力が高まらないまま)になる。そして、残念なことに、できないことを生徒のせいにしていく。

さて、学習指導案の書き方だが、小学校では6年1組社会科学習指導案と書く。小学校に勤務した経験がある私は、この考えがとても大事であると考えている。なぜなら、クラスによって実態が異なるからである。

中学校に異動した後も、同じ単元の同じ内容(たとえば第三次)であっても、クラスによって指導案の内容を変えた、ということがよくあった。クラスの特長やキャラによって、プロシージャの順序を変えるのである。それによって、指導案を書く時は、生徒たちの顔を思い出しながら、指導上の留意点などはかなり具体的に書くようになった。「個別最適な学び」ということを考えれば、静かなクラス(書くことが好きなクラス)、にぎやかなクラス(話すことが好きなクラス)のように個性が違うクラスは、その嗜好をどう活かすか、どう授業始めれば生徒が乗るのか、どう終われば余韻として心に残るのか、ということに日頃から関心を持っておかなければならない。

---

## シーン2 (授業の始まり、挨拶)

---

### ● 表層の捉え方(経験が浅い先生の視座)

- ① 教科書を置く位置(左)が決まっている。
- ② ボタンがとまっていない生徒を指導した。
- ③ リズムボックスを使っていた(乗りがよさそうなので、自分もやってみたい)
- ④ 生徒たちが教師の代わりに、日付、曜日、天候を次々に聞いていた。(自分もやってみよう)

### ● 深層の捉え方 (授業を変えるための視座)

① Q&Aの基本的なやり取りが自分たちだけでできるように訓練されていることがわかる。毎日、聞く生徒がローテーションで決まっていれば、皆んなの前で「出力」(質問をして仕切る)をすることになり、生徒はしっかりと家で練習をしてくるようになる。発音が良くなっていくのも、周りの生徒がどんどん正しい、英語らしい発音をするたびに、自分もと言うふうに思って練習をするからである。教師の方から順に生徒を当てていく限り、いつも指示待ちになる。クラスの雰囲気、それで決まってしまう。仕切ろうとすればするほど、生徒の英語熱は下降すると考えて良い。

② リズムボックスは、ストレス(強弱)を音と共に身につけられるように使っている。単に使えばいい、ではなく、生徒たちにそれを使う意義を説明している。英語の単語は、辞書に出ているように、音節(シラブル)でできている。それが、そのまま接頭語+語根+接尾語に分かれる。比較級で more を最上級で most をつける形容詞や副詞は「長い単語」という意味不明の説明をしている教師がいるが、「2音節以上の単語に more, most をつける」という正しい指導をすれば、famous が長いかどうか悩まなくても良くなる。([fa・mous]の2音節) 英語の指導は、あまりにも発音にシフトしすぎると、諦めてしまうので、日本語にない子音の発音は[f, v, l, th]に絞り、全員ができるように練習をすることである。母音は「**A**」と e を逆にした発音は、「アでもイでもウでもエでもオでもない音、舌を口のどこにも触れないように真ん中で固定する」と指導すればよい。R は「最初に小さく[u]と言うと、舌が自然と丸まり、正しい発音ができるようになる。つまり right は「(う)ライ(とう)」とさえばいいのである。

③ 欠席者をクラス全体に尋ね、話題にしている。全員が即座にその生徒の名前を言った。ということは、蒔田さんは休んでいる生徒のことも気にかけており、生徒はすぐに答えられるように仲間のことを意識していることがわかる。さりげなく I hope Ms. Morimoto will come soon, と言った。休んでいる生徒に対してそれを言うことで、大体こんな意味ではないかと guess するようになる。しかも、リピートなどさせず、自然なコミュニケーションになっている。つまり、授業を通して学級づくり(人間関係の構築、人格形成)をしていることがわかる。

---

### シーン3 ( 帯学習・ルーティンの “What am I? Show” )

---

### ● 表層の捉え方 (経験が浅い先生の視座)

- ① BGM を使うとクラス全体が明るく取り組める。(歌詞の入っていない曲だった)
- ② 蒔田先生が隣にいたので、発表者は安心できる。蒔田先生の優しさがわかった。
- ③ どの生徒も指先までピンと伸ばしていた。日頃から、生徒指導をきちんとしているのだろう。

### ● 深層の捉え方 (授業を変えるための視座)

① 蒔田先生は、言語活動では、声を大きくするため、ストレス(強弱)を体感させるために、歌の入っていない BGM、リズムボックス、チャンツを使うことがあるが、集中力が必要な活動(思考を伴う学習活動)では、一切音楽を使っていない。

② 蒔田先生はタイマー(1分)をセットするだけ。つまり、発表者は3つのヒントを言い、生徒たちに機械的な練習ではなく、“What am I? show”を班対抗にして、referential questions(キーワードから連想できる質問)を作らせている。これによって、会話が続くようになり、即興のやり取りも

できる。一年生の1学期は徹底的にQ&Aが正しくできるように指導し、2学期からは答えの後に一文付け足す、理由を言う、意見を言う、2年生では、"Show and Tell" (with referential questions) に取り組み、3年生ではDebateに取り組んでいる。

つまり、3年生からバックワードで丁寧に(緻密に)構想が練られている。こうして、学びが有機的につながっていくことで、クラス全体に楽しく、かつ真剣に思考するという雰囲気が醸成され、それが学習への足場かけとなり、生徒たちは日々鍛えられていく。教科書を先に進める、新しい文法を教えるという場当たりの指導ではなく、言語活動というよりは自然なコミュニケーション活動を通して、文法や語彙が身につくような指導体系(言語活動と文法指導の融合)をすでに20年前からやっておられたということがわかる。

③ 蒔田先生は、iPodの中に3分で一つの曲(BGM)が終わるように予め編集された曲をいくつも入れており、発表の生徒は好きな曲を選べるようにしてある。蒔田先生は、タイマーを押すだけでよい。ゲームで教師がうっかり時間を計り忘れてしまうと、公平ではなくなり、生徒はやる気を失う。それを避けるためである。また、蒔田先生は、発表者の生徒とTTをしている。よく、発表者を残して教師は窓際に移動するケースがあるが、こうすると途中で指導を入れたい時に、介入することになり、プツンと流れが切れてしまう。一方、蒔田先生は発表者が言い淀んだり、わからなかったりすると、英語で例示したり、質問者の言い方を自然な流れの中でrecastしたりされた。これは、安心感を与えるだけでなく、まだ発表をしていない生徒たちに、ポイントを指導することになり、クラス全体の"What am I? Show"の質を高めることにもつながる。

④ 発表者は「姿勢が一番美しい人、指先までピンと伸びている人を当てること」というルールが作ってある。「させる」のではなく、「したくなる」ように演出するのが教師の仕事である。

---

#### シーン4 (新しい言語材料である”現在進行形”の導入)

---

##### ● 表層の捉え方(経験が浅い先生の視座)

- ① OHC (Over Head Camera-教材提示装置) を使っているのでわかりやすい。
- ② 生徒に考えさせている。
- ④ 折り紙キング(生徒)を前に出して活躍させている。

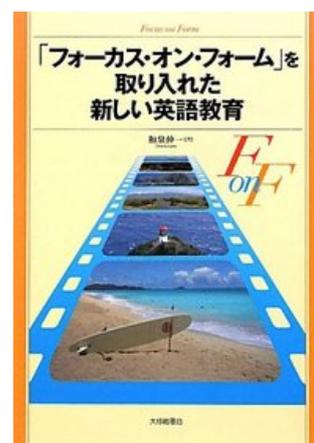
##### ● 深層の捉え方(授業を変えるための視座)

① 蒔田先生は、現在進行形を導入されるときは、必ずこの折り鶴が使われた。なぜなら、動作の繰り返しは機械的(pattern practice)ではなく、完成するまでに必要な(自然な)プロセスだからである。だから、自分で動いてI'm-ingと言ったり、事前に撮っておいたビデオの映像を見せながら、Kenji is playing tennis.などという不自然な活動は使われなかった。

続いているということがわかりにくいこと、さらに撮った映像はすでに過去のことからである。大事なことは、その言語材料の導入が、生徒(学習者)にとって自然(authentic)であること、さらに自分の体験からイメージしやすいことである。

② 先に説明をした Focus on Form とは、学習者が興味のある内容「自然な場面」を提供し、その中でさりげなく、新しい言語材料を使い、生徒にその内容、意味を気づかせる (noticing) という手法である。Focus on Forms (s がつく) は、文法や語彙を教えるから、本文の意味を考える、最後に表現をするというやり方であり、明治以来ずっと行われてきたボトムアップ型の指導である。そして、Focus on Meaning は、内容に特化された指導であり、学習者の実態が文法の指導を必要としないケース (まとめ) が多い。

F on F の草分けである上智大学の和泉伸一先生が書かれた『フォーカス・オン・フォーム』を取り入れた新しい英語教育』(大修館書店) は、F on F の指導のポイントがわかりやすく説明されているので、関心のある方はぜひ読みたい。



③ 蒔田先生が、包帯を巻いたのは、単に折り紙キングを呼ぶためでも、また後の wear につなげるためだけでもない。場面の「必然性」を作るためである。

自分で折り紙を折ることもできるが、そうすると What am I doing? と尋ねることになり、物理的に不自然。また、1年生の段階で I を You に置き換えるのは負荷がかかりすぎる。

しかし、第三者を使えば、教師も生徒も “He is …” というように、見たまま表現 (実況中継) ができるようになる。そこで、怪我もしていないのに、包帯 (中指、薬指、小指) を巻いて、Yesterday I hit my fingers. I'm hurt. I listened (heard は未習語) .. Can you help me? ということで、折り紙キングを登場させた。その teacher talk の中で、前の単元で習った can, 複数形が自然な形で何十回も使われていた。習ったことをスパイラルに入れていく、赤ちゃんが言葉を学ぶように、場面で思考を伴う繰り返しを行う、それが彼の言語観である。

さらに、最初は teaching で、Now he's making a square. Look! he's making another square.と説明した。裏返したら、今度は coaching に切り替える。蒔田 "He's making a?" 生徒 "square" 蒔田 "Right, He's making A square." このように最初をリードして生徒に繋げさせた。生徒は実像を見ながら蒔田さんの英語を聞いているうちに、その意味と言語形式を自然に繋げられるようになっていた。そして、3 ラウンド (仕上げの段階) 目では、実際に言わせた。つまり、今までは、つぶやきのように繰り返していた “What is he doing?” を、ここで初めてしっかりと “What is he doing?” と問いかけたのである。ここで、生徒は戸惑いながらも (最初、声は小さかった) はっきりと進行形の文を言い始めていた。

怪我をしていないことは、途中ですぐにはわかった。折り紙キングがおり方で戸惑った時があったが、その時、蒔田先生はとっさに隣で「こう折るんだ」とモデルを示された。そう、親指と人差し指さえ動けば、折り鶴は折れるのである。

これは、一つの単元構想だけでなく、年間を通して、いつ、どのように繋げていくかという全体構想 (どう教えるかではなく、Harry Potter の作者 Joanne K. Rowling 女史のように、「どこで何に気づかせるか」という逆算されたストーリー) ができているからである。つまり、教科書を平面的に捉え、何を教えるかという「点」を見て、プリントやスライドを作り始めるのではない。大事なものは、その時間だけでなく、立体的 (過去や未来の単元につなげる、仲間につなげる) に捉えることである。

筑波大附属中のゴールはディベート (3年)、そしてそれにつながるように、2年では Show and Tell を、1年では What am I? に取り組んでいると述べた。英語科の教師は、それぞれに必要なスキル、思考ツール、言語形式という「パーツ」をジグソーパズルのように、丁寧に組み合わせていく。

教科部会で、3冊の教科書の目次を眺め、統合的なタスク (プロジェクト) を全てコピーして並べ、指導のポイントを大きい付箋紙に書き出し、しばらくしてから見直し、何度も、何度も並べ替

え、貼り替えていく。このプロセスを教科部会でやらないまま、個人単位で授業を始めると、やがてちぎれたネックレスのようにバラバラに飛び散ってしまう。

ところで、9月に開かれた対面塾で、私は一味違う「現在進行形の導入」を紹介した。メンバーを半分に分け、1つのグループが、現在進行形を使って連続で実況中継をする。もう一つのグループが自由に動くという設定にした。前者のグループでは、ペアでじゃんけんをし、勝った人が、負けた人の後ろに立ち、教室の中から1名を抽出し、その人が今現在、何をしているかを実況中継した。” He, She “と言ってしまうとすぐに想定されてしまうので、”The person is -ing now.”と言うところがポイントである。こうすると、「全員参加の活動（自分ごと）」になる。

これは、「今、していること」をそのまま描写する練習なので、相手を変えて何度も行うことが大事である。また、教室には色んなものを用意しておくこと、机の上の筆箱などの中身も取り出す、など細かいことも伝えておくことと良い。短時間でどんどん交代し、何度も言っているうちに、「目の前で続いている」というニュアンスがわかってくる。このようにすると、picture description の練習にもなり、英検の2次試験につながる。

---

#### シーン5 (現在進行形の習熟)

---

##### ● 表層の捉え方 (経験が浅い先生の視座)

- ① OHC がリアルだっただけに、絵を使って表現する練習はちょっと拍子抜けした。
- ② 教科書に登場するキャラを使っていたので、つながりを感じた。
- ③ 現在進行形の導入から、スライドへ、そして picture card へと流れるように移っていった。

##### ● 深層の捉え方 (授業を変えるための視座)

① 蒔田先生は、英語ではなく「コミュニケーションとは何か」を教えている。だから、生徒に Right? と尋ねる。”Repeat after me.2 と突然、今までの流れを遮って、生徒に英文を繰り返させている授業の目的は何だろうか。それは、単独の英文の定着に他ならない。しかし、He is running. Right? と聞かれると、生徒は Yes, he’s running. と答える。これは、自然な「対話」になっている。蒔田先生は、(実は稲岡先生も) “Repeat” という指示を減多に使わずに、意味のやり取りで、自然に新出文法を繰り返させている。つまり、蒔田先生は英語そのものではなく、「コミュニケーションの場面で、言葉がどう使われるか」を実感させているのである。

② 実は、スライドに大きな意味があったの気づかれたらどうか。最初は、顔しか出ていない。蒔田先生は尋ねる。“Who is that?” 生徒が戸惑っていると “That’s Paul.” “What is he doing? (生徒に答えを聞かずに、そのまま隠れていた部分を見せて) Ah, he’s running. 次のスライドに行く。同じく “Who is he?” “He’s Tom.” “That’s right. What is he doing?” “He’s playing soccer.” “He’s playing soccer, really? Now look.” 次のスライドに行くと、ボールのところが隠れて「？」と描かれている。“He’s kicking.” “He’s kicking. Right. What is he kicking?” と言って次のスライドを回転させる。そこには「ボールの絵」が登場する。生徒は “Ah, he is kicking a ball.” と答える。続いて蒔田先生は3つ目の進行形に入る。“Who’s that?” “That’s Jun.” ここから彼の仕掛けが始まる。次のスライドでは、ビデオカメラの部分を隠してある。“What is he doing?” “He’s calling.” “He’s talking.” 蒔田先生は、すかさずそれをつなげて “Mmm. He’s talking. I see. Then, what does he have in his hand?” と生徒に尋ねる。そして、スライドを回転させ、ビデオカメラの絵を見せる。“He has a video camera.” “Then

What is he doing?” “He’s taking a video. (本文に登場する基本文)” “That’s right.”

この流れでもう気づかれたのではないだろうか。そう、彼は、英語の「語順」になるようにス

ライドを回転させ、生徒が自然に頭から理解していけるように仕組んでいたのである。

③ 蒔田先生は「場面でしか言葉は意味を持たない」ということを熟知している。だから、単独で英文だけを取り出すようなことは絶対にしない。教科書の「読み」が、演劇の台本を読むように、生徒は場面を読み取り、登場人物の気持ちになり、それを演じることを目標にする。（それが dramatization であり、教科書の本文の正しい読み方である）だから、ところどころで、「ここはどう読むか、それは何故か？」と問いかける。それは3年生になっても変わらない。いきなり、教師が判読をしないで、まず、教科書準拠の音声聞かせ、それで内容（場面）を考えさせている。

そこで、蒔田先生が用意された3枚の Picture Card を思い出して見ていただきたい。スライドで使った絵が再登場する。そして、蒔田さんは「3ラウンド」の練習を導入する。つまり、どの生徒もわかるように small step ではなく babystep（スロープのようにつながる）の指導を展開した。



1ラウンド目は、Paul が走っている写真を見せ、生徒に尋ねる。スライドで一度やっているので、生徒はすぐに答えられる。“Who is that?” “That’s Paul.” “He’s running, right?” “Yes, he’s running.”

“Who is that?” “That’s Tom.” “He’s kicking a ball, right?” “Yes, he’s kicking a ball.”

“Who is that?” “That’s Jun.” “He’s taking a video, right?” “Yes, he’s taking a video.”

2ラウンド目に入る。蒔田先生「シフト！」（リフレーミングのこと）“Now you’re Jun.”

“Jun, who is that?” “That’s Paul.” “He’s running, right?” “Yes, he’s running.”

“Jun, who is that?” “That’s Tom.” “He’s kicking a ball, right?” “Yes, he’s kicking a ball.”

“Jun, who is that?” “That’s Jun.”（思わず、自分が Jun であったことを忘れて生徒は言った）

それを受けて、蒔田先生はもう一度、“Jun, who is that?” と聞き返す。そこで、自分が Jun であることを思い出してハッとした生徒は、“That’s me.”と言った。続けて“You’re taking a video, right?”と聞くと、生徒はゆっくりと“Yes, I am taking a video.”と答えた。見事な「なりきり」（場面を活かした指導）である。

そして、3ラウンド目が“You’re Katie.”である。つまり、生徒が Katie の立場で蒔田先生に質問をする。生徒 “Who is that?” 蒔田 “He’s Paul.” 生徒 “He’s running, right?” 蒔田 “Yes, he’s running.” こうして3枚、辿々しくも、しっかりと練習をした生徒たちに、蒔田先生はペアで2往復練習をするように言う。生徒たちは、「Picture card を指差しながら」練習をしていた。つまり、日頃から Picture card を貼り出すことで、生徒が「教科書の場面」に入り込んで（登場人物になりきって）音読練習（正しくは「演読」になる）をしていることがわかる。だから、休み時間の音読の時に、生徒たちは picture card が貼ってあった場所を指差しながら “We can see the ocean now.”と言っていたのである。

---

## シーン 6（新出単語の解説）

---

### ● 表層の捉え方（経験が浅い先生の視座）

- ① 新出単語の指導が、授業がかなり進んだ後だった。
- ② 生徒たちが、フォニックスのポイントや発音の留意事項を知っていた。
- ③ 生徒とやりとりしながら、単語の説明をしていった。

### ● 深層の捉え方（授業を変えるための視座）

① なぜ、本文（英文）を読んでから、新出単語の導入をしたのか。耳を鍛えるためである。言語の習得は「入力」が重要な意味を持つ。特に、英語のような「音声言語」の場合は、正しい発音、正しいストレスが重要になる。耳で聞いて、そのまま（英語の語順のまま）理解できる生徒を育てたいなら、guessする力、挑戦して解決しようとする力をつけてやらねばならない。単語を教え、発音をリピートさせ、覚えさせると言うボトム・アップの「依存的な指導」(Focus on Forms)ばかりしていると、知らない単語が出てきた時点で、諦めてしまう。

② やみくもに、頭から Phonics のルールを教えるのは、生徒にとってマイナスになる。何故なら、Phonics は例外が多く（よく使われる単語に例外が多い）、生徒は「全部、暗記しなければならないのか」と途方に暮れてしまうからである。蒔田さん（北原さん、田尻さん、稲岡さん、中嶋もそうだが）は、たとえば、どの時点で [-e (マジック e)] に気づかせるかを「単元計画」で作っている。よって、むやみに教えず、あくまでも「帰納的」(今まで習った単語の共通点は?) に気づかせている。

uniform や wear のところでは、具体的にどう使うかという例を挙げておられた。また、wearing の発音に含みを持たせ、running のように短母音と関連づけて（伏線）おられた。

Kを発音しない単語の指導では、knife, know,のほかに knight も使えと判断された蒔田先生は、咄嗟に英語で western old samurai, king, queen, knight と説明をし始めたら、生徒が「あーっ」と言った。単に単語の意味を教えるだけでなく、関連する言葉、派生語、冒頭でも説明したように「母語との比較」など、多様に広げていくことで、生徒は単語に関心を持つようになる。

③ 文字が小さく、クラスの後ろの生徒が読めない可能性はあったが、彼の真骨頂や板書をしながらインタラクション (interaction) をすることである。それが、自然なコミュニケーションとなるからである。

用意した短冊を貼ってリピートさせる、最初からパワーポイントやデジタル教科書に頼って練習をするのではなく、生徒と interaction をしながら（生徒の既習を活かしながら）、「ついでに」と欲張らずに最低限・最小限の指導にしている。なぜなら、彼は指導を細分化し、単元全体を通して、いつ、どのタイミングで指導をすれば、より有効で、かつ定着しやすいかを考えているからである。

これは、付箋紙やカードに指導の要点を書き出し、並べてみないとわからない。何かに書いて思考するという習慣を持っていない教師は、思いつきの指導、または「今まで通り」の指導で終わってしまう。次に、その学年を担当するのは3年後、また同じことを繰り返すのだろうか。実にもったいない話である。

---

## シーン 7 (本文の読みの練習)

---

### ● 表層の捉え方 (経験が浅い先生の視座)

- ① 後ろから音読を確認し始めた。(前の生徒だけでなく後ろの生徒も大切にしている)
- ② “Go, Go, Goal!” に絞って教えていた。読み方を工夫させたいからだろう。

### ● 深層の捉え方 (授業を変えるための視座)

- ① 本文の読みでは、リズムボックスで「ストレス」を意識するようにされていた。また、最後の読みでは、BGM (FIFA の音楽) を使って、臨場感を作り出していた。
- ② 「本文はどこで切れるか」と言う、蒔田先生の推論発問によって、生徒は場面を頭に思い描く。そして、それを活かして自分なりに読もうとするようになる。

## シーン8 (授業の最後、Focus on Form の仕上げ) チャイムが鳴ってもやらなければならないこと

## ● 表層の捉え方 (経験が浅い先生の視座)

- ① ホワイトボードを使って現在進行形の説明をした。
- ② たっぷりと練習をしているので、説明はすでに「意味」に気づいていた。
- ① あえて、-ing の作り方のルールを本時で説明しなかった。

## ● 深層の捉え方 (授業を変えるための視座)

① Focus on Form は「伏線 (モヤモヤ感)」を作っておくので、その回収 (そうだったのか!) は絶対に行わなければならない。本時の場合、生徒は、be 動詞と -ing を使って「~している」という状況になると薄々気づいていた。しかし、文の構造をきちんと示し、一般化しなければ、生徒に定着しない。どんなに時間が過ぎようが、それが抜けてしまっただけでは「学び」が完結しないまま授業を終えることになる。毎時間の最後に「振り返り」を用意し、「何どころまで理解できたか。何ができるようになったか」を自由記述で学習履歴として残しておくことが大事なのはそのためである。

本時は、研究授業というよりは、研究発表 (土曜日、次の授業まで時間がある) という名目であり、参観者は蒔田さんの授業を見にきている。よって、授業時間が少々延びても許されるところがあった。もし、通常の授業であれば、最後の生徒3人の音読はカットして、最後の意味付け (現在進行形) に入っていたはずである。優先順位で考えると「重さ」が違う。

② be 動詞+動詞の原型 ing を「動詞」として捉えさせる教師は多い。

多くは、I am writing English on my notebook. と教えている。

S V O

しかし、I'm running. は目的語を取らない。だとしたら、同じ進行形でも文によって SV になったり、SVO になったりするのでは、生徒は混乱する。正しくは、「be 動詞は自動詞であり、目的語を取らない」というルールを徹底することである。-ing (「している」という意味の現在分詞) の部分は、I'm hungry. I'm tired. の形容詞と同じ意味を持つと説明されたのはそれが理由である。

彼の「2つは仲が悪いよね」という言葉から、be 動詞と一般動詞は同時には使われないことが徹底されていたことがわかる。それに繋げる意味もあった。さらに、彼は「短母音があると最後の子音を繰り返す」ということについて深く触れなかった。塾に行っている生徒は、「短母音だから」とつぶやいたが、そこで彼は、すかさず「じゃ、なぜ、短母音だと繰り返すの? (問) 来週、わかります」と言った。すでに、構想はできており、本時の最後を「ツァイガルニク効果」を使って「知りたい」という状況にして授業を終えている。

(参考) 英語の指導は、暗記させることではなく、学習者が「納得」できる説明にすること。

I'm writing English / on my notebook. (現在進行形)

SV C (書いている最中)

The story was written by Soseki. (受け身)

S V C (書かれた状態)

③ 高校の英語教師は、FOREST や NEXT STAGE を使って生徒に文法の定義を教えているので、文法指導について造詣が深い方が多い。ただ、言語活動と文法の指導がバラバラの状況になっており、「コミュニケーション I」が「グラマー」に変身している授業を数多く見てきた。一方、中学校教師は言語活動のバリエーションは多く知っているが、文法については「怪しい (間違った知識のまま教えている)」状況であることが多い。

たとえば、SVOCのOCの関係がnexusであることを詳しく説明できない。現在完了の「継続」と現在完了進行形の説明の違いがうまく説明できなくて混乱する。条件節(if)と仮定法過去の違いが曖昧なので、If I have ten million yen now, というテーマを平気で使う教師もいる。また、whenとifの使い方(If you're freeとWhen you're freeがどう違うのか説明できない)の勘違いも目立つ。中学生相手と言えども、英語教師たる者、教材研究は、いきなりプリントを作るのではなく、生徒が「納得」できる説明ができるよう、辞書で単語の発音やシラブル(音節)を確認し、自分の言葉でわかりやすく説明できるように、文法書をしっかりと読んで理解しておくことが大事である。

---

## シーン 9 (宿題の出し方、授業が終わってした生徒の全体への挨拶)

---

### ● 表層の捉え方 (経験が浅い先生の視座)

- ①プリントが宿題になっている。
- ②生徒がプリントを渡すときに、"Here." "Thankyou."と言って渡していた。
- ③挨拶は、よくしつけられている。

### ● 深層の捉え方 (授業を変えるための視座)

① 蒔田さんはプリントを配布される時に“A present for you. No. 126”と言われた。筑波大附属中学校の研究発表は11月に行われる。ということは、4月からずっと計画的に「教科通信」(宿題ではなく、理解を深めるための課題)を配ってこられ、授業でやったことを活かした「反転学習」ができるように、学習を深化させようとしていることがわかる。

② “Here.” “Thank you.”と言わせることが大事なのではなく、ものを渡すとき、受け取った時にどう行動すべきなのかを、実際のコミュニケーションとして教えている。さらに、大事なのは、彼のクラスでは、後ろ向きになって目を合わせてプリントを配っているということである。後ろも見ずにプリントだけを”Here.”と言って渡しているクラスを見たことがあるが、蒔田さんの「ねらい」ではなく、「形」だけを真似ようとしている。「何のため」を理解していないとこうなる。それは、全て教師に委ねられる。そう考えると、思わず、ゾワッと背筋が寒くなった。

③ 蒔田先生は「最後の挨拶までが授業」と考えている。自分の研究授業が挨拶と共に終わったら、後は生徒を見ていない教師が多いが、蒔田さんは生徒たちの動きをよく見て、きちんと来校者に向けてのエチケットを守り、「授業をみてくださった方に挨拶をする」ことを徹底している。さらに、どの生徒も笑顔で、堂々と大きな声で挨拶をしていたのは、蒔田先生に英語を学んでいるという自負心と誇りから生まれている。教師は、生徒にそう思われる存在でありたい。

---

## 【終章】

3 グループのアドバイザーの吉田先生は、退院をされてからも体調が心配されていた(3グループの振り返りのコメントも少なかった)のですが、元気になられたようで、彼女から次のようなメールが届きました。それを報告しておきます。

私は、片面印刷にしています。並べ替えながら、自分なりの読み方を目指したいとおもったからです。中嶋先生がおっしゃいます通り、かなり分厚くなりました。グループによってまとめ方に特色があり、驚きました。できることは無限にあると思いました。

このボリュームのレポート冊子に編集していただいたこと、深く読み込まれ謎解きをしていただくこと、私たちをここまで引っ張り上げていただいたこと、全てに感謝するのみです。

昨日、私は、DVD "6 way street" の蒔田先生の映像を教育実習生の方と視聴しました。小学校算数の採用試験を受けておられる4回生の方で、中高英語の免許取得にいられています。

真面目な方ですが、学習指導要領の用語が分からない、クラスルームイングリッシュがなかなか使えない、授業のめあて、まとめ、振り返りを繋ぐことができないので、まさに手取り足取り教えています。これから、このような先生が教壇に立たれる時代がやってきたのだと、複雑な思いを抱いています。

この塾に参加されている皆さんは、英語(国語、数学、特別支援)教育に関する知識と情熱があります。今後の日本のそれぞれの教育を牽引されるであろうパイオニアばかりです。

会議の度に深まる学びは、皆の財産です。この塾で学べることを誇りに思います。

下線を引いた部分に注目してみましよう。退職され、アドバイザーという立場で参加していただいているが、ご自分はまだまだ発展途上だと考えられ、学び続けようとされています。

学びは「個」で完結します。ですから、今回のように「成果物」のメンタリング(仲間の書いたもの、仲間の考えなど)からハッと気づけた方は、さらに上を目指すようになります。

ある受講生の方から、「全体のまとめ(62ページ)の中で、最も多く使われていた言葉は『生徒』だった。それは蒔田先生の『生徒目線』が皆さんに浸透したからではないか」という報告がありました。その方は、すでに3度も読まれたようです。一読して「わかったつもり」では、一過性で終わります。すぐに元の授業に戻ってしまうでしょう。しかし、2回目は付箋を貼っていき、3回目はキーワードの使われている回数を数えてみる、そして4回目は・・・というように、自分で目的を持って違う見方をしてみる。それこそが、主体的な学び、「探求」になるのではないのでしょうか。

皆んなで作ったという満足感だけで終わるのか、それとも本当の「宝物」にするために、徹底的に書き込んで学ぼうとするのか。それは、あなたが決めることです。

自分が「モデル」としたい人の文章を音読筆写する。「これは！」という書き方をされているものだけを別に印刷してまとめ、いつも持ち歩きながら、読んでみる、研究をしてみる。学びはどれだけでも工夫できます。その「学び方」を自分で考えることです。自己決定こそが、行動や学習意欲の起爆剤となるからです。自ら、自己更新しようとする人間になれること、それこそが主体的(自律的)学習者の証です。

さて、次回の「稲岡先生の授業」で、あなたはどれだけ●に迫る見方ができるでしょうか。いや、もうすでに、自分の授業をリニューアルする視座のポイントに気がついたという方もおられるかもしれませんね。いつか、その授業を見せていただける日が来ればいいですね。

---

56人の方だけに向けて書いた、中嶋の「最新刊」はいかがでしたか(😊)。

リーダーさんは、せっかくの機会ですので、蒔田さんの授業デザインから学んだことを11月の「単元計画」さらには「1年間の構想づくり」に活かせるよう、早速、自分の感想やコメントなどをグループで話し合ってみられてはどうでしょう。

授業のリニューアルは、11月の単元計画の研修まで待つ必要はありません。苦手な生徒たちは、明日からでも「今の授業を変えてほしい」と願っています。待ったなしです。